

男子も一生けんめい

吉野 幸枝

石川県立総合看護専門学校

原田幸子さん、久しぶりの懐かしい声のたよりをありがとうございます。聖バルナバ病院での学生時代と、勤務していた時代、「幸子さん」の愛称で私たちの姉貴的存在で、大変お世話になりました。あの小さな身体のどこにと思うくらいのバイタリティあふれる仕事をされ、私はいつも刺激を受けていました。

私は今看護学校教員生活 11 年目となり、家庭より仕事に重きをおき無我夢中の時を過ごしてきました。現在、定時制の進学コースの 41 名(うち男子 13 名)のクラス担任兼母性実習の担当をしています。新カリキュラムにともない、男子の母性実習を今年の 2 月より開始致しました。手さぐりの状態の中で、毎日男子学生と共に実習をしている現状について書かせていただきます。

実習開始前の準備

私は、男子の母性実習をどのようにすすめたらよいかわからず、先輩諸姉の文献等を参考に考えました。そして、① 条件が許す限り男女の区別なく学んでもらう、② 6 人グループの中に男子学生を 2 名ずつ配置し、こまやかな配慮や理性的な考えを互いに学んでもらう、③ 学生自身の発達段階、レディネス等を考えて、実習の時期・メンバー・実習ローテーションを配慮する、このようにすすめることにしました。また、入学時より講義の中で動機づけをしたり、実習直前に学生全体にアンケートをとって、不安のフォローをしたりしました。

「何が不安ですか」の質問に対して、男子学生の答えは「自分は学生としてできる限りの努力をしようと思っているが、妊産婦さんに拒否されたり、

気を使わせたりして迷惑をかけるのではないか」というように、ほとんどが産婦さんに対する配慮の意見でした。そこで、これらの点は臨床指導者の方々や教員が十分配慮するので頑張ってください、と励ましました。男子学生は「僕たちは第 1 回の母性実習生として捨て石になったつもりで頑張ります」と答えてくれました。この言葉を聞き、なんとか学生の気持ちを支えながら、学びの多い実習にしたいと、気持ちのみが高まりました。

そして、いよいよ実習先である金沢赤十字病院の産婦人科病棟の婦長・係長・臨床指導者の方々に、学校としての意図も含めて実習内容を説明させていただきました。

説明終了後、「何か疑問や質問等がありましたら…」と、内心心配しながら尋ねました。すると婦長より、「何を聞こうにも今のところは具体的には出てこないの、とにかくやってみましょう。やっていく中でいろいろな問題を一緒に考えていきましょう」との返答がありました。この一言でとても救われた気持ちになり、心から、よろしくお願いしますと一礼しました。

臨床実習の開始です

学生に対しては、しっかり体験して学んで欲しいという思いがあります。同時に産婦さんには、女性の一生の中のできごととして、出産体験をより素晴らしいものとして受けとめていただきたいという思いがあります。そこで臨床指導者の方々は、産婦さんの気持ちを第一に考えて、産婦さんに、男子学生の実習の受け入れについて気持ちを確認して下さい。許可が得られると、陣痛室・分娩室・褥室・新生児室とお世話をさせていただ



くのです。

男子学生のほとんどは20代の独身です。学生自身は不安を隠しきれないくらい持っており、それを乗り越え必死で学ぼうとする姿勢が伝わってきます。

陣痛室で、陣痛の波に合わせて懸命に圧迫法を続けている姿をみて胸が一杯になることもあります。また分娩見学後の感想として、「女の人って大変なんですね。もし自分の妻であれば、かわいそうでそばにいられないかもしれない」、「一生懸命いきんでいるお母さんと一緒に力を入れていました」、「お産ってすごい、自分の母親もこのようにして自分を産んでくれたのか」等、彼らの衝撃は大きいようです。

新生児とのかかわりにおいても多くを学んでくれています。生後数日のベビーを、生まれて初めて抱くという男子学生。抱き方を説明すると何度もモデル人形で確認し、いざ本番です。力の入れ具合、支え具合がわからないと訴えながら、自分の身体にぴったりつけて抱いています。そしてコットに寝かせた時のホッとした表情、なんとも暖かい愛情が伝わってきます。

また、中には、ベビーを抱いた時、ベビーに何と言葉がけをしたら良いかわからない、と悩んでいたけれども、毎日抱いているうちに自然と自分の口からあやす言葉が出て、自分自身驚いたという学生もいます。

ある日、1人の男子学生が褥婦さんを前にその褥婦さんの赤ちゃんの沐浴をしていましたが、あまりにも緊張したので、学生の顔面から汗が吹き出て目に入り、動作が中断してしまいました。そのときそばにいた女子学生は、すばやく自分のハ

ンカチで汗を拭いてあげ、沐浴を無事終えることができました。

産婦さん、臨床の皆さんありがとう

学生をこころよく受け入れて下さっている産婦さん、ありがとうございます。学生は確実に学びを深めています。

そしてスタッフの皆さん、多忙な中、学生のことを常に気づかって下さってありがとうございます。グループごとのカンファレンスの時、指導者の方は「今のところ、男子の学生さんが受け持ったことで産婦さんや褥婦さんからの苦情はありませんよ」と、いつも言って下さるのです。この一言で男子学生は、自分たちの言動に確信が持てると同時に、不十分だったかかわりについて自己を振り返ることができます。もちろん毎日そばについている私自身も胸をなでおろす一瞬です。

今、ようやく3グループが終了したところです。教員の役割として、学生・妊産褥婦・スタッフの間を調整しているつもりですが、まだまだ不十分です。学生が生き生きと、楽しく、新しい発見ができるよう、そして5年先10年先に「母性実習を行なっていてよかった」と言える看護師が育つよう、かかわっていきたくと思っています。

* * *

次は、仙台での看護教員養成講習会の時、一緒に楽しく学び、お世話になった笠松愛子さんです。現在宮城県多賀城市で助産院を開業され、活躍されています。とても優しく、そばにいただけでホッとさせて下さる方です。看護教員をやめて助産院を開業された経緯など、お聞かせいただきたいと思っています。